11

進路指導の一助となった

日本ユニセフ協会への訪問

報告者　長崎県立島原高等学校　猿渡　雄介先生

1、活動のポイント

本校は、県の教育方針並びに教育努力目標を受け、本校の歴史と伝統を尊重し、郷土の期待に応える教育を推進するため、「輝け★21世紀の旗手・青き楓たち」を教育スローガンに掲げ生徒の育成に努めています。平成13年度からは、将来の進路目標確立にむけたキャリア教育の一環として、修学旅行の行程に東京都内の事業所訪問研修を行っています。今回そのひとつとして日本ユニセフ協会を訪問しました。

本校校舎

2、訪問活動

開発途上国の保健センター

難民キャンプのテント

日本ユニセフ協会では、まず「世界の子どもたちの状況やユニセフの活動内容について」のビデオを見ました。次に、ボランティアさんの案内で、１・２階の開発途上国の生活の様子を見て回りました。そこでは、

・ビタミンが不足している国の子どもたちのための、ビタミンＡ入りのカプセル。

・水汲みに時間をとられて、学校に行けなかった子どもたちが、井戸ができて学校に行けるようになった井戸。

・スクールインアボックス

など、ユニセフが行っている支援活動の実物を見たり体験したりしました。

最後は、「ユニセフに就職するには」「この仕事のやりがいを感じること」「私たちにもできること」などの質問に答えていただきました。

3、生徒の感想

○今回、お忙しい中わたくしたちの研修のために説明や案内をしてくださってありがとうございました。初めて知ることばかりで、私はまだまだ世界のことについて理解していないと思いました。貧しい国の子どもたちの生活は自分たちからかけ離れていて驚きました。と同時に今の豊かな暮らしに感謝しなければならないと思いました。私たちは学校に行くことができるし、安全な水も食料もありますが、それはあたり前ではないことが分かりました。だからユニセフの活動はとても重要で意味あることだと改めて感じました。とても充実した研修になりました。

○私は、前からユニセフなどの社会支援に興味を持っていましたが、なかなかそれらに接する機会がありませんでした。今回、ユニセフを訪問することができ、とても身近なものに感じました。また、私たちの日常生活はとても幸せなものなんだなと改めて実感しました。私は、将来苦しんでいる子どもたちのために役に立てるような職業に就くため、これからの学校生活をより充実したものにしていきたいです。

○ユニセフの活動には心を打たれ、開発途上国の子どもたちには、自分の日常生活を見直されました。生まれた国が生死の分かれ目であってはならないと思いました。高校生の私たちにとっては募金することに限界がありますが、そんな私たちでもできることは「世界の現状を知り、世界で何が必要とされているか考えること」だということをおっしゃられていました。なので、今よりもっと世界について知ろうと思います。自分にできる最大級のことを常にやって生きたいです。

4、成　果

今回の日本ユニセフ協会への訪問では、丁寧な説明をいただき、生徒一人ひとりが、見識を深め、進路指針の一助とする初期の目的を達成することができました。

訪問した生徒からは、「担当の方の熱心で丁寧な対応に感激しました。」「ボランティアさんは，ご自身のお仕事に責任を持ち、お客様のことを第一に考えておられる姿が印象的でした。」「訪問して本当によかったと思います。」など、多くの感動と感謝の言葉が聞かれました。

今回の訪問を振り返り、反省を生かし次回に引き継ぎ役立てる目的で、訪問を終えて日本ユニセフ協会・学校事業部にアンケートをお願いしました。